

「主イエスを殺す計画」

2023年11月10日

さて、過越祭と言われる除酵祭が近づいていた。祭司長たちや律法学者たちは、どのようにしてイエスを殺そうかと謀っていた。彼らは民衆を恐れていたのである。その時、十二人に数えられる一人でイスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿の管理者たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談した。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会を狙っていた。（ルカ22：1～6）

イスラエル最大の祭である過越祭と言われる除酵祭を迎えようとしていた。祭司長たちや律法学者たちは主イエスをどうにかして殺そうと謀っていたが、民衆が主イエスに対して篤い支持と敬意を払っているため、民衆の反発を恐れ、手出しできないでいた。主イエスは霊の力に満ち、その言葉に権威があり、彼ら自身も驚くものであった。彼らが主イエスを亡き者にしたい最大の理由は、自分たちが営々として築き上げてきた宗教体制を、主イエスが壊したからである。神殿当局は律法の遵守を説き、律法の下でピラミッド型の差別管理体制を作り上げ、律法を守らない、守れない者を「罪人」と烙印し、ユダヤ共同体から排斥した。最も残酷なことは、重い病を得た者は、病は罪に対する神の裁きとされ、彼らも共同体から排除されたことであった。主イエスは、罪人といわれた病人のもとに行き、彼らを癒やし、人間として立たせ、共同体に復帰させていった。居場所を失い、魂を殺されていた人々を尊厳ある人間に回復させたのである。このことは、当局にとっては、律法体制が壊され、許せないことであった。彼らは、主イエスが活動している所に仲間を遣わし、監視し、違反を告発したが、主イエスは構わず、安息日の律法に反し、民衆を人間に立ち返らせていった。当局は、これに忍耐できなくなり、主イエスの殺害を謀るようになったのである。更に、過越祭に合わせて、主イエスはエルサエムに上り、神殿で暴利を貪る商人たちを暴力的に追い出す「宮清め」を行った。これは、神殿当局者には、権威を侮られ、面子が潰されることであった。彼らの怒りは頂点に達し、主イエスの殺害は避けられないこととなった。しかし、民衆の主イエスへの支持と敬意が、殺害の実行を阻んでいた。どんなに権力があろうとも、民衆の思いには勝てなかったということである。

そのような時、十二弟子の一人、イスカリオテのユダの心の中にサタンが入った。彼は、祭司長や神殿を管理する者たちの所に行き、主イエスを引き渡す相談を持ち掛けた。当局は喜び、金を与える約束をした。ユダは承諾して、群衆のいない時に主イエスを引き渡そうと、機会を狙うようになった。「イスカリオテ」はユダヤ地方の村の名前である。他の弟子たちはガリラヤ出身であったのに対し、ユダはユダヤ出身であったようだ。「ユダ」は「神に感謝する」という意味で、この名の人が多い。ユダは主イエスから十二弟子の一人として、選ばれたにもかかわらず、なぜ、当局に引き渡すようになったのか。ヨハネ福音書には、ユダは、主イエスの宣教団の「金入れを預かっていた（ヨハネ13：29）」と会計のような役目をしていたと記し、弟子たちから信頼されていたようだ。著者ルカは、「ユダの中にサタンが入った」と書いている。文面からは「（当局は）ユダに金を与えることに決めた」と、金銭が引き渡しの理由のように、読めるが、ユダは複雑に屈折した精神の落ち主で、引き渡しの理由は判然としない。人を貶める時の心は闇に包まれているので、ユダ自身もはっきりとは分かっていたのではないか。